

の中部志留利亞より *Monograptus* なる筆石類と共に *Psilophytae* の *Thursophytaceae* に入るべき新屬 *Baragwanathia* を發見せり、本屬は *Drepanophycus* に近縁を有するもので莖軸は星狀の斷面を有する原生中心柱を有し、葉は長形にして葉跡及葉脈を有する眞正の葉で螺旋狀に密生し、其の葉腋に腎臟形の芽胞囊を生じ同一型の芽胞を生ず、他の一は *Yarravia* と稱する新屬にして複子囊は枝の末端に生ずるもので、其の各孢子囊は下半は相互に合し、上半は離れしもので、丁度先頃 HALLE 博士が發見せる羊齒狀種子植物の新科たる *Whittleseyineae* や *Potonieineae* の如き合生孢子囊を有し或は本類中殊に後者に近きものゝ如し、若し果して然りとすれば泥盆紀にも羊齒狀裸子植物 *Eospermatopteris* (*Aneurophyton*) 等 *Aneurophytaceae* と共に更に之より進歩したのものもありしが如し、第三は *Hostimella* sp. である、中部志留利亞に既に如此高等のものがあつたとすると吾人は更に考察の態度を改めざるを得ない。それで今時は是が地球上最古の陸生植物となつたわけである。(G. KOIZUMI)

**セツチエル氏：海産植物と太平洋の古地理** (W. A. SETCHELL: Marine Plant and Pacific Paleogeography, in Proceedings of the Fifth Pacific Congress, Canada, vol. IV (1934) 3117—3131, With fig. I—II).

大多數の地史學者は太平洋は世界で最も古い特質を有すると云ふが又一方に於て一部の生物地理學者の間には極めて太古の時代を除いても尙その現在に似た形ちでのみ存在して居たか如何かについては判然せぬとの議論がある。

J. W. GREGORY (1930) は一部は地史學的の、大部分は生物地理學的の論據からして太平洋の地質時代の種々の時期には色々の陸塊や陸橋が存在して居たと云ふ考へに傾いて居る、SETCHELL は海草及海藻の分布を論じて、その方面から見た過去の太平洋を推論して居る。

海草類即ち海産顯花植物は何れも單子葉植物中の沼生類 (*Helobiae*) に屬し、主に地中海、印度洋、西太平洋及びカリビア海に分布して居る。その内で前三者の間は各共通の種類的事も、何れかの一地域のみが別種な事も、それから三者が何れも別種で代表されて居る事もあるが、此等の海草は太古、西地中海から北アフリカと歐亞大陸とを経て現在の印度洋と太平洋の境界まで擴がつて居たと想像される大テンス海で出現し、又はそこで優勢であつた所の太古の海草類から分化したものであらうと考へられる、此等は此の海の連絡が亂され始めた始新世中葉の始めから漸新世にかけて最も旺盛に繁茂し、それが鮮新世にヒマラヤ山脈が隆起してテンス海の東部が消滅するまで續いたものと想像される、即ち現生海草の種類の不連続分布の一部は地中海と印度太平洋間の海水の連絡が陸地の隆起の爲めに斷れたに歸せらるべく

Dec. 1935.

239

兩者間に相對する似た別群が存在するのはその証據である、又海藻類の二三にも此の不連続分布の例が見られる。

しかし印度洋、太平洋、及オーストラリアの熱帯近海に對してカリビア海にもそれ等のものゝ置換えられた群があるのは説明に困難である、その間の連絡は太平洋を通じて行はれたともカリビリ海から各太平洋及地中海に分散したとも考へる事が出来るからである。

カリビア海にはヒルムシロ科に屬する二つの印度太平洋群に相當する群が産する、地中海にも實際二つの此科に屬する群があるにもかゝらず此等はカリビア海の群よりもむしろ印度太平洋又はオーストラリアの群に相當する、従つて始新世及び漸新世の間にパナマ海峡及び中央アメリカの狭部を越えた狭い海の連絡があつて、そこでカリビア海と太平洋とが續いて居り、それによつて此の兩者の間に海草の移住が行はれたのであらう、であるから太平洋は少くとも第三紀の間は他にさえざるものゝない太平洋であつたと想像する事が出来る。

(大井次三郎)

#### 南洋栽培協會編：南洋の栽培事業 pp. 1123 (1935).

本邦人の海外への發展は鎖國主義の改められた明治の維新に始まり西歐諸國に比してずつと新しいのであるがその間にあつて特に最近の發展は北に南に目ざましく、なみだぐましいものがあり本書も之れを如實に物語る一証據である、本書はどちらかと云ふと南洋方面の農業を主とする經營や移民者の爲めの指針書である上に抄録者が農業方面に明るくないにもかゝらず紹介し様とするのは邦書に乏しい南洋方面の有用植物に關する書としても適當と信ずるからである、本書は大部分新嘉坡在住の照屋全昌氏の編著で有用植物に關する記述は中編の大部分を占めて居る、南洋で最も重要なゴム類の栽培に次いで馬來半島、蘭領印度、英領ボルネオ、ヒリツピン、英領印度、ビルマに於ける有用材、椰木類、纖維植物、藥用有毒植物、香味藥味及精油類、食料飲料及嗜好植物園藝植物の各項にわたつて所々實物の寫眞入で網羅してあるので有用植物を知るのにも大變便利である。

東京麹町區丸の内二丁目二番地南洋栽培協會の發行で定價金七圓である。

(大井次三郎)

マツクリューア氏：——支那産ヒビランチク屬の種類 Mc CLURE: The Chinese Species of *Schizostachyum*, in Lignan Science Journal vol. 14, no. 4 (Oct. 1935) 575—602, pl. 34—39.

著者は支那廣東の嶺南大學にあつて親しく支那産の同屬植物の生品を見、又多數の標品を調べた結果次の五種を認めて居る。